YMS解答速報 日本 医科大学



2019年2月28日更新

$\begin{bmatrix} I \end{bmatrix}$ 数列 $\{a_n\}$ は次を満たしている:

$$a_{n+1} = 2a_n + 3n + 4^n \ (n = 1, 2, 3, \dots), \ a_1 = -6$$

このとき以下の空欄 アーヘーシーに適する1以上の整数を解答欄に記入せよ.

問 1 数列 $\{b_n\}$ を $b_n = a_{n+1} - a_n$ $(n=1, 2, 3, \cdots)$ で定義するとき, b_{n+1} を b_n と n を用 いて表すと

$$b_{n+1} = \boxed{\mathcal{F}} b_n + \boxed{1} \cdot \boxed{\dot{\mathcal{F}}}^n + \boxed{\mathcal{F}}$$

である.

|問2 数列 $\{c_n\}$ を $c_n=b_n+3$ $(n=1, 2, 3, \cdots)$ で定義するとき, c_{n+1} を c_n とnを用い て表すと

$$c_{n+1} = \begin{bmatrix} \dot{x} & c_n + \begin{bmatrix} \dot{x} & \dot{x} \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} \dot{x} & \dot{x} \end{bmatrix}^n$$

である.

問3 数列 $\{a_n\}$ の一般項をnを用いて表すと

$$a_n = 0$$
 $f^{n-1} - 2$ $f^n - y$ $f^n - y$

である.

解答 問 1
$$b_{n+1} = 2b_n + 3 \cdot 4^n + 3$$
 問 2 $c_{n+1} = 2c_n + 3 \cdot 4^n$

問 3
$$a_n = 2 \cdot 4^{n-1} - 2^n - 3n - 3$$

【解説】

問 1

$$a_{n+2} = 2a_{n+1} + 3(n+1) + 4^{n+1}$$

$$a_{n+1} = 2a_n + 3n + 4^n$$
 ...

①②を辺々ひくことで

$$a_{n+2} - a_{n+1} = 2(a_{n+1} - a_n) + 3 \cdot 4^n + 3$$

$$b_{n+1} = 2b_n + 3 \cdot 4^n + 3$$

問 2

$$c_{n+1} = b_{n+1} + 3$$

$$= 2b_n + 3 \cdot 4^n + 3 + 3$$

$$= 2(b_n + 3) + 3 \cdot 4^n$$

$$=2c_{n}+3\cdot 4^{n}$$

$$c_{n+1} = 2c_n + 3 \cdot 4^n \cdots$$

問3

ここで、③の両辺を 2**1 で割ることで

$$\frac{c_{n+1}}{2^{n+1}} = \frac{c_n}{2^n} + 3 \cdot 2^{n-1}$$

よって、n≥2において

$$\frac{c_n}{2^n} = \frac{c_1}{2} + \sum_{k=1}^{n-1} 3 \cdot 2^{k-1}$$

ここで、 $c_1 = b_1 + 3 = a_2 - a_1 + 3 = -5 - (-6) + 3 = 4$ であることから

$$\frac{c_n}{2^n} = 2 + 3 \cdot \frac{2^{n-1} - 1}{2 - 1} = 3 \cdot 2^{n-1} - 1$$

$$c_n = 3 \cdot 2^{2n-1} - 2^n$$
 (これは $n = 1$ でも成り立つ)

$$b_{n} = 3 \cdot 2^{2n-1} - 2^{n} - 3$$

$$=6\cdot4^{n-1}-2^n-3$$

さらに、 $a_{n+1}-a_n=b_n$ であることから

 $n \ge 2$ において、

$$\begin{aligned} a_n &= a_1 + \sum_{k=1}^{n-1} b_k \\ &= -6 + \sum_{k=1}^{n-1} (6 \cdot 4^{k-1} - 2^k - 3) \\ &= -6 + 6 \cdot \frac{4^{n-1} - 1}{4 - 1} - 2 \cdot \frac{2^{n-1} - 1}{2 - 1} - 3(n - 1) \\ &= 2 \cdot 4^{n-1} - 2^n - 3n - 3 \quad (2\pi h)^{\frac{1}{2}} n = 1 \quad (3\pi h)^{\frac{1}{2}} (2\pi h)^{\frac{$$

- Ⅱ 以下の各問いに答えよ.
- 間1 関数 $\log(x+\sqrt{x^2+1})$ の導関数を考えることにより,不定積分 $\int \sqrt{x^2+1} dx$ を求 めよ. なお積分定数は省略してよい.
- 間 2 xy 平面上の双曲線 $x^2 y^2 = -1$ (y > 0) と直線 y = x および 2 直線 x = 0 , x = t(ただし、t>0) で囲まれる部分の面積 S(t) を求めよ.
- 問3 kを実数の定数とする。 問2の S(t) に対して t(t>0) の関数 $S(t)-k\log t$ が $t \to +\infty$ で収束るための、定数 k に対する必要十分条件を求めよ、また、そのときの

解答 問 1 $\frac{1}{2} \{x\sqrt{x^2+1} + \log(x+\sqrt{x^2+1})\}$ (積分定数省略)

問 2
$$S(t) = \frac{1}{2} \{t\sqrt{t^2 + 1} + \log(t + \sqrt{t^2 + 1}) - t^2\}$$

問 3
$$k = \frac{1}{2}$$
 極限値 $\frac{1}{4} + \frac{1}{2} \log 2$

問1 (以下, 積分定数は省略して考えるものとする)

に注意する.

$$I = \int \sqrt{x^2 + 1} \, dx$$

とおく. 部分積分により

$$I = \int \sqrt{x^2 + 1} \, dx = x\sqrt{x^2 + 1} - \int \frac{x^2}{\sqrt{x^2 + 1}} \, dx$$

$$= x\sqrt{x^2 + 1} - \int \left(\frac{x^2 + 1}{\sqrt{x^2 + 1}} - \frac{1}{\sqrt{x^2 + 1}}\right) dx$$

$$= x\sqrt{x^2 + 1} - \int \left(\sqrt{x^2 + 1} - \frac{1}{\sqrt{x^2 + 1}}\right) dx$$

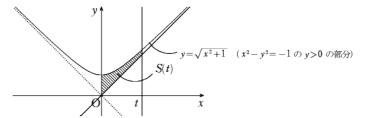
$$= x\sqrt{x^2 + 1} - \int \sqrt{x^2 + 1} \, dx + \int \frac{1}{\sqrt{x^2 + 1}} \, dx$$

$$= x\sqrt{x^2+1} - I + \log(x + \sqrt{x^2+1}) \quad (:: \textcircled{1})$$

$$\therefore 2I = x\sqrt{x^2 + 1} + \log(x + \sqrt{x^2 + 1})$$

:.
$$I = \frac{1}{2} \{x\sqrt{x^2+1} + \log(x+\sqrt{x^2+1})\}$$
.....@

図の斜線部分の面積が S(t) だから



$$S(t) = \int_{0}^{t} (\sqrt{x^2 + 1} - x) dx$$

である.

② (問1の結果) を用いて

③ (間2の結果) から

$$\begin{split} S(t) - k \log t &= \frac{1}{2} \{ t \sqrt{t^2 + 1} + \log (t + \sqrt{t^2 + 1}) - t^2 \} - k \log t \\ &= \frac{1}{2} \{ t \sqrt{t^2 + 1} + \log (t + \sqrt{t^2 + 1}) - \log t^{2k} \} \\ &= \frac{1}{2} \{ (t \sqrt{t^2 + 1} - t^2) + \log (t + \sqrt{t^2 + 1}) - \log t^{2k} \} \\ &= \frac{1}{2} \left\{ (t \sqrt{t^2 + 1} - t^2) + \log \left(\frac{t + \sqrt{t^2 + 1}}{t^{2k}} \right) \right\} \dots \text{ (4)} \end{split}$$

$$A = t\sqrt{t^2 + 1} - t^2$$
, $B = \frac{t + \sqrt{t^2 + 1}}{t^{2k}}$ とおく.

以下, A, Bに対して, $t \rightarrow \infty$ のときを考える.

$$\begin{split} A &= t(\sqrt{t^2 + 1} - t) \\ &= t \cdot \frac{1}{\sqrt{t^2 + 1} + t} \\ &= \frac{1}{\sqrt{1 + \frac{1}{t^2}} + 1} \to \frac{1}{2} \ (t \to \infty) \cdot \dots \cdot (5) \end{split}$$

であり、次にBが収束するかどうかを調べると

$$B = \frac{1}{t^{2k-1}} \cdot \left(1 + \sqrt{1 + \frac{1}{t^2}}\right)$$

だから

$$k > \frac{1}{2}$$
 のとき $B \to +0$ より $\log B \to -\infty$

YMS解答速報 日本 医科大学後

2019年2月28日更新

$$k < \frac{1}{2}$$
 のとき $B \to \infty$ より $\log B \to \infty$

であり、ともに発散し、不適. つまり、 $k=\frac{1}{2}$ が必要である.

このとき $B \rightarrow 2$ から

$$\log B \to \log 2 \ (t \to \infty) \ \cdots \cdot \cdot \cdot \cdot \cdot \cdot \cdot \oplus$$

と分かる. 以上から, $S(t) - k \log t$ が $t \to \infty$ で収束するための必要十分条件は

$$k=\frac{1}{2}$$

実際このとき、4(5)6)から

$$\lim_{t \to \infty} \{S(t) - k \log t\} = \frac{1}{2} \left(\frac{1}{2} + \log 2 \right) = \frac{1}{4} + \frac{1}{2} \log 2$$

「Ⅲ】 O を原点とする座標空間において 1 点 A(0, 0, 4)をとり、点 B(1, 1, 1)を中心と する半径1の球面をSとする. S上の点Pを動かしたときに直線APとxy平面との交 点 Q が描く図形を D とする.

問1 D上の点 Q の座標を(x, y, 0)とするとき, x, yの満たす不等式を求めよ.

間 2 x, y, X, Y を実数, i を虚数単位とし, θ は $0 \le \theta < 2\pi$ を満たすとする. 複素数 平面における点 z = x + iy を、原点を中心として θ 回転した点が Z = X + iY となった とき、x、y を X, Y, θ を用いてそれぞれ表せ、答えのみでよい、

問 3 D を xy 平面上で原点を中心として θ 回転(ただし、 $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$)して得られる図 形を表す X, Y の不等式に XY の項が含まれないように、 θ の値を定め、D の面積を 求めよ.

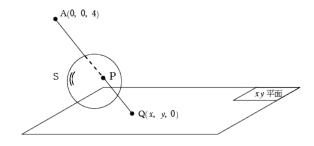
解答 問 1 $9x^2 + 9y^2 - 2xy - 24x - 24y + 16 \le 0$

問2 $x = X\cos\theta + Y\sin\theta$, $y = -X\sin\theta + Y\cos\theta$

問 3 $\theta = \frac{\pi}{4}$ 面積 $\sqrt{5}\pi$

【解説】

問1



点Pは直線AQ上にあることから、実数tを用いて

$$\overrightarrow{OP} = \overrightarrow{OA} + t \overrightarrow{AQ} = (0, 0, 4) + t(x, y, -4)$$

= $(tx, ty, 4 - 4t)$

と書ける. さらに、点 P は球面 S: $(x-1)^2+(y-1)^2+(z-1)^2=1$ 上にあることから $(tx-1)^2+(ty-1)^2+(3-4t)^2=1$

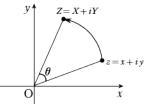
$$\iff (x^2 + y^2 + 16)t^2 - 2(x + y + 12)t + 10 = 0 \quad \cdots$$

をみたす実数 t が存在する. ①を t の二次方程式と見て、判別式を D とすると

$$\frac{D}{A} = (x + y + 12)^2 - 10(x^2 + y^2 + 16) \ge 0$$

$$\therefore 9x^2 + 9y^2 - 2xy - 24x - 24y + 16 \le 0 \cdots 2$$

問 2



zはZを原点のまわりに $-\theta$ 回転して得られるので

$$\begin{aligned} x + iy &= (X + iY)(\cos(-\theta) + i\sin(-\theta)) = (X + iY)(\cos\theta + i\sin\theta) \\ &= (X\cos\theta + Y\sin\theta) + i(-X\sin\theta + Y\cos\theta) \end{aligned}$$

よって、実部と虚部を比較することで

$$x = X\cos\theta + Y\sin\theta$$
, $y = -X\sin\theta + Y\cos\theta$ 3

問3

不等式②で表される領域の左辺の式は、 x と y を入れ替えても変わらないので、領域 Dはy=x に関して対称な2次曲線であることがわかる.

よって、領域 D(不等式②)を原点のまわりに $\frac{\pi}{4}$ 回転すれば、 XY の項がない不等

③に
$$\theta = \frac{\pi}{4}$$
 を代入すると
$$\begin{cases} x = \frac{1}{\sqrt{2}}X + \frac{1}{\sqrt{2}}Y \\ y = -\frac{1}{\sqrt{2}}X + \frac{1}{\sqrt{2}}Y \end{cases}$$

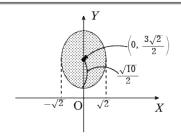
$$\begin{split} 9 \Big(\frac{1}{\sqrt{2}} X + \frac{1}{\sqrt{2}} Y \Big)^2 + 9 \Big(-\frac{1}{\sqrt{2}} X + \frac{1}{\sqrt{2}} Y \Big)^2 - 2 \Big(\frac{1}{\sqrt{2}} X + \frac{1}{\sqrt{2}} Y \Big) \Big(-\frac{1}{\sqrt{2}} X + \frac{1}{\sqrt{2}} Y \Big) \\ - 24 \Big(\frac{1}{\sqrt{2}} X + \frac{1}{\sqrt{2}} Y \Big) - 24 \Big(-\frac{1}{\sqrt{2}} X + \frac{1}{\sqrt{2}} Y \Big) + 16 \leq 0 \end{split}$$

$$\therefore \quad \frac{9}{2}(X^2 + 2XY + Y^2) + \frac{9}{2}(X^2 - 2XY + Y^2) - 2\Big(\frac{1}{2}Y^2 - \frac{1}{2}X^2\Big) - 24\sqrt{2}Y + 16 \leqq 0$$

$$10X^2 + 8Y^2 - 24\sqrt{2}Y + 16 \le 0$$

$$\therefore \quad \frac{X^2}{2} + \frac{\left(Y - \frac{3\sqrt{2}}{2}\right)^2}{\frac{5}{2}} \le 1$$

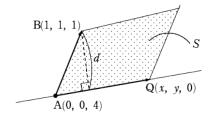
これより、この不等式で表される領域を XY 平面に描くと、次のようになる.



つまり、長半径 $\sqrt{\frac{5}{2}} = \frac{\sqrt{10}}{2}$ 、 短半径 $\sqrt{2}$ の楕円の内部および外周なので、

求める面積は
$$\pi \times \sqrt{\frac{5}{2}} \times \sqrt{2} = \sqrt{5} \pi$$

【問1の別解】



図の平行四辺形の面積Sに注目する. Sをベクトルを用いて表せば

$$S = \sqrt{|\overrightarrow{AQ}|^2 |\overrightarrow{AB}|^2 - (\overrightarrow{AQ} \cdot \overrightarrow{AB})^2} \cdots$$

 $S = |\overrightarrow{AQ}| \cdot d \cdot \cdots \cdot (\widehat{5})$ 一方で、 点Bと直線 AQ の距離を d とすれば (4)(5)より

$$\sqrt{|\overrightarrow{AQ}|^2|\overrightarrow{AB}|^2 - (\overrightarrow{AQ} \cdot \overrightarrow{AB})^2} = |\overrightarrow{AQ}| \cdot d \cdot \cdots \cdot \textcircled{6}$$

$$\overrightarrow{AQ} = \overrightarrow{OQ} - \overrightarrow{OA} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ 0 \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ -4 \end{pmatrix}$$

$$\overrightarrow{AB} = \overrightarrow{OB} - \overrightarrow{OA} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ -3 \end{pmatrix}$$

これを⑥に代入して、

$$\sqrt{(x^2 + y^2 + 16) \cdot (1^2 + 1^2 + (-3)^2) - (x + y + 12)^2} = \sqrt{x^2 + y^2 + 16} \cdot d$$

$$\therefore \sqrt{11(x^2 + y^2 + 16) - (x + y + 12)^2} = \sqrt{x^2 + y^2 + 16} \cdot d$$

$$\therefore d = \sqrt{\frac{11(x^2 + y^2 + 16) - (x + y + 12)^2}{x^2 + y^2 + 16}}$$

とわかる.

点 Q が存在する範囲は、点 P が S 上に存在する. つまり、

「点 B と直線 AQ の距離 d が 1 以下」

であればよいから.

$$d \le 1 \iff \sqrt{\frac{11(x^2 + y^2 + 16) - (x + y + 12)^2}{x^2 + y^2 + 16}} \le 1$$

YMS解答速報 日本 医科大学後





2019年2月28日更新

$$\therefore \frac{11(x^2+y^2+16)-(x+y+12)^2}{x^2+y^2+16} \le 1$$

これを整理して.

 $9x^2 + 9y^2 - 2xy - 24x - 24y + 16 \le 0$

 $\| [extbf{IV}] \| n \otimes 1$ 以上の整数とし, $oldsymbol{p}$ を $0 < oldsymbol{p} < 1$ を満たす実数とする.白球n,黒球n個, 合計 2n 個の球が入った袋から球を無作為に取り出す試行を考える。ただし、取り出した ||球は袋にもどさない.さらに,袋の中の白球は1秒経過するごとに確率 p で黒球に変化 し、袋の中の黒球と袋から取り出した球は色が変化しないものとする。また、1以上の繋 $\| extbf{\textit{x}} N$ に対し,以下の問題文中で「N秒後に袋から球を取り出す」とは,袋に2n個の球 ■を入れてから N 秒後に起こり得る袋の中の球の色の変化が完了した直後に球を取り出す ことを意味する、このとき、以下の各問いに答えよ、

- 問1 1秒後、2秒後に袋から球を1個ずつ取り出したとき、取り出した2個の球がどち らも白球である確率を求めよ.
- 問 2 1 秒後、 2 秒後、…、 n 秒後に袋から球を 1 個ずつ取り出したとき、取り出した n個の球がすべて白球である確率をP(n)とする.一方、別の試行として、色の変化が起 こらないものとして、2n個の球が入った袋からn 個の球を取り出したとき、取り出し たn 個の球がすべて白球である確率をQ(n)とする。このとき、以下の極限値を求めよ

$$\lim_{n\to\infty}\frac{1}{n^2}\log\left(\frac{P(n)}{Q(n)}\right)$$

問3 n秒後に袋から n 個の球を取り出したとき、取り出した n 個の球がすべて黒球で ある確率をR(n)とする.このとき,以下の極限値を求めよ.

$$\lim_{n\to\infty}\frac{1-R(n)}{n(1-p)^n}$$

ただし、必要ならば0 < a < 1 に対して $\lim na^n = 0$ が成り立つことを証明なしに用い てよい.

解答 問 1 $\frac{n-1}{2(2n-1)}(1-p)^3$ 問 2 $\frac{1}{2}\log(1-p)$ 問 3 $\frac{1}{2}$

【解説】

問1 1秒後に取り出された白球と、2秒後に取り出された白球の選び方は。P。通り、 それぞれの白球が1秒後, または2秒後に白球のままである確率は, 1-p, $(1-p)^2$ で ある. したがって.

$$\frac{{}_{n}P_{2}\cdot(1-p)\cdot(1-p)^{2}}{{}_{2n}P_{2}}=\frac{n-1}{2(2n-1)}(1-p)^{3}$$

問2 条件を満たすとき、n個の白球は取り出されるまで、どれも黒球に変化しない。 したがって.

$$\begin{split} P(n) &= Q(n) \cdot (1-p)^1 \cdot (1-p)^2 \cdot (1-p)^3 \cdot \dots \cdot (1-p)^n \\ &\log \left(\frac{P(n)}{Q(n)} \right) = 1 \cdot \log(1-p) + 2 \cdot \log(1-p) + 3 \cdot \log(1-p) + \dots + n \cdot \log(1-p) \\ &= \frac{1}{2} n(n+1) \cdot \log(1-p) \\ &\lim_{n \to \infty} \frac{1}{n^2} \log \left(\frac{P(n)}{Q(n)} \right) = \frac{1}{2} \log(1-p) \end{split}$$

問3 元が白球だった球がn秒後に白球である確率は $(1-p)^n$ であるから、この白球がn秒後に黒球になる確率は $1-(1-p)^n$ である.

したがって、n 秒後に取り出される黒球のうち、元は白球だった球が k 個、最初から黒

球だった球がn-k個取り出される場合を考えると、その確率は

$$\frac{{}_{n}C_{k}\cdot{}_{n}C_{n-k}}{{}_{2n}C_{n}}\cdot\left\{1-(1-p)^{n}\right\}^{k}$$

ここで、1-p=a (0 < a < 1) とおく. k=0, 1, 2, …, n の場合があるので、

$$R(n) = \sum_{k=0}^{n} \frac{{}_{n} C_{k} \cdot {}_{n} C_{n-k}}{{}_{2n} C_{n}} (1 - a^{n})^{k}$$

$$= \frac{1}{{}_{2n} C_{n}} \sum_{k=0}^{n} {}_{n} C_{k} \cdot {}_{n} C_{n-k} (1 - a^{n})^{k}$$

ここで、 $(1+x)^n \cdot (1+x)^n = (1+x)^{2n}$ の両辺を展開し、 x^n の係数を比較すると、

$$\sum_{k=0}^{n} {C_k \cdot x^k \cdot {}_{n} C_{n-k} \cdot x^{n-k}} = {}_{2n} C_n \cdot x^n$$

から,
$$\sum_{k=0}^{n} {}_{n}C_{k} \cdot {}_{n}C_{n-k} = {}_{2n}C_{n}$$
 である. また, ${}_{n}C_{k} \cdot {}_{n}C_{n-k} = ({}_{n}C_{k})^{2}$ であるから,

 $\sharp k$, ${}_{n}C_{k} \cdot k = n \cdot {}_{n-1}C_{k-1}$ $rac{t}{t}$ $rac{t}{t}$ $rac{t}{t}$ $rac{t}{t}$

$$\sum_{k=0}^{n} ({}_{n}C_{k})^{2} \cdot {}_{k}C_{1} = \sum_{k=0}^{n} {}_{n}C_{k} \cdot {}_{n}C_{k} \cdot k = \sum_{k=0}^{n} {}_{n}C_{k} \cdot n \cdot {}_{n-1}C_{k-1}$$
$$= n \sum_{k=0}^{n} {}_{n}C_{k} \cdot {}_{n-1}C_{k-1}$$

と変形でき、さらに、 $(1+x)^n(1+x)^{n-1}=(1+x)^{2n-1}$ の両辺を展開し、 x^n の係数を比較 すると.

$$\sum_{k=0}^{n} {}_{n} C_{k} \cdot x^{k} \cdot {}_{n-1} C_{n-k} \cdot x^{n-k} = {}_{2n-1} C_{n} \cdot x^{k}$$

から,
$$\sum_{k=0}^{n} {}_{n}C_{k} \cdot {}_{n-1}C_{n-k} = {}_{2n-1}C_{n} \iff \sum_{k=0}^{n} {}_{n}C_{k} \cdot {}_{n-1}C_{k-1} = {}_{2n-1}C_{n}$$
である.

また、
$$2n \cdot_{2n-1} C_n = {}_{2n} C_n \cdot n \iff {}_{2n-1} C_n = {}_{2n} C_n \cdot \frac{n}{2n}$$
 であるから、

$$\frac{1}{{_{2n}C_n}}\sum_{k=0}^n ({_nC_k})^2 \cdot {_kC_1} \cdot a^n = \frac{1}{{_{2n}C_n}} \cdot n \cdot {_{2n-1}C_n} \cdot a^n$$

$$= \frac{1}{{_{2n}C_n}} \cdot n \cdot {_{2n}C_n} \cdot \frac{n}{2n} \cdot a^n$$

$$= \frac{n \cdot a^n}{2} \quad \cdots \cdot 2$$

したがって,

$$\lim_{n\to\infty}\frac{1}{n\cdot a^n}\cdot\frac{1}{2nC_n}\sum_{k=0}^n({}_nC_k)^2\cdot{}_kC_1\cdot a^n=\lim_{n\to\infty}\frac{1}{2}=\frac{1}{2}\quad\cdots\cdots$$

また、iを2以上の整数として、

$$\frac{1}{n \cdot a^{n}} \cdot \frac{1}{2^{n} C_{n}} \sum_{k=0}^{n} ({}_{n} C_{k})^{2} \cdot {}_{k} C_{i} (a^{n})^{i}$$

$$= \frac{1}{n \cdot a^{n}} \cdot \frac{1}{2^{n} C_{n}} \sum_{k=0}^{n} ({}_{n} C_{k})^{2} \cdot {}_{k} C_{1} \cdot a^{n} \cdot \frac{{}_{k} C_{i}}{k} (a^{n})^{i-1}$$

YMS解答速報 日本医科大学後

YMS HPICも 掲載中! https://yms.ne.jp/



2019年2月28日更新

$$=\frac{1}{2}\cdot\frac{{}_{k}C_{i}}{k}(a^{n})^{i-1}\quad(\because\ \textcircled{2})$$

ここで、
$$0 < \frac{{}_kC_i}{k} < \frac{k^i}{k} = k^{i-1} \le n^{i-1}$$
 であるから、

$$0 < \frac{1}{n \cdot a^n} \cdot \frac{1}{2^n C_n} \sum_{k=0}^n ({}_n C_k)^2 \cdot {}_k C_i (a^n)^i < \frac{1}{2} \cdot (n a^n)^{i-1}$$

 $\lim_{n\to\infty} na^n = 0$ であるから, はさみうちの原理により,

$$\lim_{n\to\infty}\frac{1}{n\cdot a^n}\sum_{k=0}^n({}_nC_k)^2\cdot{}_kC_i(a^n)^i=0\quad\cdots\cdot\cdot$$

①, ③, ④より,

$$\lim_{n\to\infty}\frac{1-R(n)}{n(1-p)^n}=\frac{1}{2}$$

【講評】

[Ⅰ][Ⅱ][Ⅲ]はいずれも日本医科大学を受験するクラスになると典型的 で経験がある問題ばかり.YMSのテキストにほぼ同じ設定の問題があ る. ここを最少失点で切り抜けたい.

[IV] は読み取りが非常に難しい問題であるが、読み取れれば(1)(2)は取 れるだろうか。(3) は時間内に解くには厳しすぎる内容だった。

前期の合格者の層は、昨年度までと比較して、レベルが上がっている印 象を受ける、後期の倍率も考えると、75%をきっちり取りたい問題であ る.他の科目次第では 60%程度までは許容か.

対策 内容 二次試験の要点解説

個人面接対策

小論文対策

集団討論対策

重きを置く評価がされます。YMSでは個人面接・集団討論・小論文ま でトータルな指導を行い、勝ち抜くコツを伝授します。

【申込方法】・一次試験合格者が対象です。

- ・受付開始は各大学ともに一次の結果発表以降となります。
 - ・お電話(03-3370-0410)でご予約下さい。



〒151-0053 東京都渋谷区代々木 1-37-14 https://yms.ne.jp/

@*03-3370-0410*